
君のとなり

はな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のとなり

【Nコード】

N2449Y

【作者名】

はな

【あらすじ】

「藤野？」

閉店間際のスーパー、油断しまくりの格好で買い物していた私は、思いがけず声をかけられる。

スーツ姿の男性は、なんと初恋の初彼。

みつともない自分に焦る私だったが、なぜか家まで送られることになってしまい…。

※品の無い表現が多用してあります。

気を悪くされませんように、予めご注意ください。

「藤野、だよな？」

「ひゃあっ！」

低い声に耳元でささやかれて思わず変な声が出た。

咄嗟に口元を押さえながら振り向くと、至近距離に立つ、長身のイケメン眼鏡スーツ男…って…

「えっ…とお…」

誰？なんですが…？

思い当たる節もなく、ついついじっくり顔を見ると、相手も負けじと思ったのか身を屈め、顔を寄せてきて…って、ちょっと近い！近い！！

「だっ！誰?!」

引っ繰り返りそうになる声でそう叫ぶと、一瞬キョトンと目を丸くして

「俺、たかやだよ？」

わかんないかあと見せた困ったような笑顔は、確かに見覚えあり。

たかや…たかや…って…

眼鏡の奥から何か言いたげに見ている薄茶の瞳に気付く。

あれ…？

これって…もしかして…

「高谷くん…?!」

ふいに掘り当ててしまった記憶に、心臓がばくばくし始めた。

まさかでしょ？

嘘だね?!

変な汗が滲みだした私と裏腹に、イケメン君は頷きながらいかにも
晴れやかに笑ったわけで。

「信じられない…!」

会ってしまった。

高谷くんと。

見られてしまった。

こんな私を。

いくら三十路間近とはいえ、いや、逆にだからこそ、同窓会なんか
では一応ちゃんとしてるフリをしてる。

服装にも、髪型にも、気を遣って、誰に見られても恥ずかしくない、
むしろ見られたい私。

だけどさ、それは特別で、普段ってあるじゃない？

普段にも、人に会える段階とか、それ以下とかある訳で。

近所のスーパーの閉店間際だからって、油断しすぎたこっちが悪いんだけど。

お風呂上がりの濡れ髪をクリップでまとめただけのテキトーな髪型、ノーブラにTシャツ着てるの誤魔化すためにパーカー羽織って、そこから辺に投げてた短パンはいて、足元はサンダル、

カゴの中には、賞味期限間近の割引シール貼りまくり商品とビールが数缶転がって、

…って、どんだけカッコ悪いの、オバサンな自分。

中学卒業間近に転校してった高谷くんは、

初めて私を好きだ、と言ってくれた人で、
初めてキスをした人で。

私が初めての恋をした人。

忘れたつもりで、でも心のどこかで、いつか会えることを望んでた気がする人。

そんな彼にやっと会えたのに…この状況って！

運命のいたずらに、笑いたいような、泣きたいような気持ちになつて。

「びっくりした…元気だった？」

顔が見れなくて俯いてしまう。

「藤野？」

少ししわのついたスーツ、会社帰りなのかな？

きちんと磨かれた靴、すらっと伸びた足…カッコいい。

それなのに、私みっともない…ちゃんとしてるときはちゃんとしてるのに…。

とりとめのないことをぐるぐる考えてもいると、

がって肩を掴まれてパーカーの前身頃が合わされて

「へ？」

ジジーツとジッパーを閉められてしまった。

予想外の出来事に呆気にとられて見上げると

「お前…見えてたぞ」

って、ほんのり赤い顔して、斜めに視線を逃がしながら言ったくせに。

自覚できるぐらい赤くなった頬に、無意識に触れた私の手の動きに、つられたように戻ってきた眼差しは一瞬熱くて。

「ごっ…、ごめ…ん、変なもんみせちゃって」

なんとなく間が保たなくてへらっと笑う。

何か言いたそうに口を開いて、でも結局何も言わず。

鳴りだした閉店の音楽に、高谷くんはさらっと私の買い物カゴを奪い取った。

「買い物、こんだけ？」

頷くとスタスタとレジへ向かう。

ぎゃー！やめてえー！

もう見られちゃってるけど、割引商品買いまくりを具体的にレジで読み上げられるなんて恥過ぎるう！

焦って追い掛けてみたものの、内心の叫びむなしく、ぼっちり聞かれ…。

神様…初恋の彼氏相手に、今日は何プレイを強いられてるんですか？わたし…

高谷くんの顔が見られないままお金を払って外に出る。

律儀にレジ袋まで持ってくれてた彼に

「ありがとね」

とりあえずお礼を行って、逃げるように自宅に戻って

買い込んだビールを飲んで、ひたすら寝て、今日のことは忘れる…
という私の計画は、最初のところでつまづいた。

「そんな格好で、1人で帰せるわけないだろ」

と半ば怒った高谷くんは、送られてしまうことになったからだ。

歩いてほんの5分程度。

夜道に響くペタペタサンダルとコツコツ革靴とガサガサレジ袋の不
協和音。

なんだか恥をかきすぎて、どうでもよくなった気分
で隣を歩く、びっくりするくらいかっこよくなった高谷くんを眺める。

背が高いなあ。

昔はちょうど同じぐらい、だったのに。

まだ眼鏡かけてるんだ。

昔は私もメガネっ娘だったから、初めてキスしたときぶつけちゃっ
たんだよね。

バカだよなあ…でもなんか、かわいいな。

ふふっ…と笑いかけて、いつの間にか物思いに浸っていたことに気

付いた。

ふと見ると高谷くんと目が合って、眼差しに浮かぶ可笑しそうな優しい色が、なんか恥ずかしくてむかつ、として

「なによ？」

と問えば、

「いやー？ 久しぶりに近くで見たけど、やっぱり可愛いなってさあ」

って、さらっと吐いて、オヤジかお前は。

思わず無言になった顔を、ん？ って可愛く覗いてくる感じとか：

なんか女慣れの雰囲気で、ちょっとイケメンになったからって…なんかムカつく、高谷くんのくせに。

告白してきて、オツケーしたら泣いちゃった、純情ボーイ高谷のくせに。

イライラしたからバンバン歩いて、もうアパートは目の前だった。

「もういい。ありがとう」

アンタタッチャブルな美しい思い出が汚された気分で、
つつけんどんに差し出した手を、高谷くんはなぜかぐいっと引いて

「うわっ?!」

ぼすつと胸元に抱き込まれるってどういう展開？

「たっ！高谷くん?!」

硬直状態の体をぎゅっ、と抱き締められて、おでこの上を顎ですりすりされて。

「藤野、今日しない？」

って…。

「なっ…!」

この場合の、しないって、つまり…アレ、だよな？

あまりのショックに遠くなりかけた意識は、背中でガサツとなったレジ袋の音で引き戻された。

レジ袋よ、ありがとう。

「何よそれっ！あんたばっかじゃないのっ!」

じたばた暴れるけど、びくともしない高谷くん。

「十数年ぶりに会って、いきなりそんなことするわけないでしょ!」

うっかり乳を見せたのが火をつけたのか？

慣れた仕草で頬を寄せて、

ダメ？と耳元で囁く甘い声に心がささくれ立つ。

こいつ…、もしやいつもこの手でお持ち帰りしてるのか？

そう考えたら本気で腹が立ったから、

「痛っ…！ひでえ…」

「こっちだって痛いっつーのっ！」

顎に一発ヘッドバッドをかまして、緩んだ腕からスルツと逃げて

「あんた最っ低！」

ダッシュしようとしたのに嗚呼アラサーの悲しさか、走りだす前に今度は後ろから抱きつかれて振り出しに戻る。っていうより状況悪化。

「放して！」

「やだね」

降ってきた怒った声は、

「来年でもう30になるんだぞ！」

って、一体何にキレてんの？

「…はぁ？」

「はあ？俺はいつまで待ったら約束通り、藤野抱けんだよ？」

って、えっ？えっっ？

「や、約束…？」

振り返ると、高谷くんは、いつか見たことのある、子どもっぽい拗ねた顔をしていた。

「高校ん時、したじゃん」

その顔を見て、かああっと顔に血が上がる。

高校一年の春、会いに来てくれた高谷くんに迫られて、でもどうしても怖くて、恥ずかしくて、

「大人になったらあげる」

と、苦し紛れに初めてを約束して逃げてきたことを思い出したから。

「そっ…、そんなの、もうとっくに時効でしょ?!」

「誰が決めんだよ？」

「っていうか、まだ信じてるとか、ちよっと異常だよ！」

「異常って…」

傷ついた目の色に罪悪感が頭を擡げるけど、ここで負けたらやられ

てしまう。

「なんでずっと会ってなくて素性もわかんない人とそういうことで
きると思うわけ?!

出来る訳ないじゃん!」

叫ぶように一気に吐き出せば、背中に感じる高谷くんがうなだれた
のがわかって。

と…とりあえず危機的状況脱出成功?

刺激しないようそっとホールドから抜け出そうとした私は、
再びぎゅっと拘束されて、自分の認識の甘さを思い知らされた。

「だからっ…!」

いい加減大騒ぎして警察呼ぼう!

叫ぶために息を吸い込もうとした私の肩口に顔を埋めて

「…折原不動産に勤務しております、たかやさとる、と申します。
高い山に学ぶ、と書いて、さとる、です」

何を思ったか、ぼそぼそと自己紹介をはじめた高谷くん。

「…ちょ、ちよっとお」

おいおい、解釈まちがってるよ君って、誰か彼に突っ込んでくれ。

「高校、大学は他県で過ごしましたが、中学まではこちらで育ちま

した」

って知ってるし。

「こちらには…初恋の女性を探しに戻りました。

人づてに、この辺りで働いていると聞いて、一目会いたくて…」

「一発やりたくて、でしょうが」

イラっときて言ってみると、耳元で、はぁ、とため息つかれて。

「否定はしない。

異常って言われれば、自分でもそうかも知れないって思う。でもさ…」

抱く腕に、ぎゅうっと力がこもって、レジ袋がガサガサ。

「会ってなくてもずっと考えてた。

ずっと好きなんだ、藤野のこと」

…思考停止。

「…執念深くて気持ち悪い？」

…言われればそんな気も。

「本当は結構前に見つけてたのに、

いざとなるとどうやって声かけるか悩んで、

今日はほんとに偶然で…チャンスだと思って…」

カサカサ鳴るレジ袋。

…手が震えてる？

「藤野とのこと終わったなんて、俺のなかでは思ったことない。藤野にとっては昔の彼氏でも…俺は…、俺にとっては…」

続かなくなった言葉に、そっと振り向いて窺うと、案の定。

「…またですか」

街灯を反射してキラキラ光る、眼鏡の中の水溜まり。

我慢できない笑いに震える振動が伝わったのか、

「…笑うな」

ぐすつ、と鼻をすすりながら怒ったって。

はぁ、と力が抜けた。

思い出す、中3の夏。

近所の神社の夏祭り。

友達とはぐれた私の手を引いて、一生懸命に捜してくれたっけ。

見つからないまま、最後の花火が始まって、泣き出してしまった私をぎゅっと抱き締めて。

あの頃は正面にあった彼の目に、花火の明かりがきらきら映ってた。

「藤野、彼氏いる？」

声が出なくて、首を振る。

「…なってもいい？」

急にそんなこと言われても、どうしていいかわかんなくて固まっていると

「だめ…？」

…ああ、甘えるように顔を覗きこむのは、この頃からのクセだったね。

いつまでも答えない私から、諦めるようにそっと離された手も微かに震えていて。

「あのっ…！」

後退るように距離をとろうとしたシャツの裾を掴んで引き止めた。

「い…いいよ…」

自分も震えてしまう指先を見つめながら伝えた答えはかすれた小さな声しかならなくて。

黙ったままの彼に、もう一度伝えたほうがいいのか迷って顔を上げると

「…泣いてるの？」

ぷいっと横を向いた高谷くんが瞬きするたびに、虹色の滴が眼鏡に飛んだ。

「…悪いかよ」

素っ気ない眼鏡のせいか、大人びた印象をもっていた目の前の少年が、

初めて見せた子どもっぽい拗ねた顔に、胸の奥をぎゅっと掴まれて。

「…とりあえず、今日はしないからね」

はあ、思い出しちゃった。

あの頃の気持ち。

組まれた両手の中で、私は高谷くんと向かい合った。

スーツのポケットをこそごそして、あ、あった。

取り出した高谷くんのハンカチを、ほらっ、と差し出すと

「…藤野のがよかった」

「贅沢言うな、スーパー行くだけなのに、そんなもん持ってないよ」
笑って言うと、仕方なさそうに腕を解いた高谷くんからレジ袋を受け取って。

目元を拭いた後、眼鏡もふきふきする高谷くんにあゝあ、と思う。

「眼鏡はさあ、ハンカチで拭くと細かい傷付いてダメになるよ」

きょとんと見返す薄茶の瞳。

「…そうなの？」

「そうだよ！」

常識ないなあ、困ったもんだ。

「…再開した恋人にも、肉体関係迫る前にやることあるでしょ？」

軽く睨み付けければ、誤魔化すように眼鏡をかけて視線を隠すけど

「例えば愛を囁いてみる、とかさあ」

ヒントをあげれば、意味を測るように、ちゃんと瞳を覗いてきて。

「…手順を踏めば、考えないでもないよ、って事？」

お利口さん、正解です。

高谷くんは口元を手で覆って、視線を逸らして、考え込むような仕

草をした。

だけどそれが、にやけてしまう顔を隠すための、必死の努力だったのはバレバレで。

ハンサムスーツな彼が滲ませる喜びの源が、自分だって気分は…正直悪くない。

っていうか、女として普通に嬉しい。

「…明日、休み？」

期待を込めた目が覗き込んでくる。

「休み、だけど？」

答えると、ぱっと笑顔になって

「じゃあ、デート」

ねっ？て、その甘え方に漂う女慣れの気配に、断ってやろうかって考えも、一瞬よぎったりするけれど。

世の中には、焼け木杭になんとやらって言葉もあったりする訳で。

「すっごおーく、楽しみにしとく！」

ハードルを上げるつもりで言った私の言葉に、素直に頷いて、飲み過ぎんなよ、と、高谷くんはからかうようにレジ袋をつついた。

「おやすみ」

手を振って、部屋に入って
ふとカーテンの隙間から覗けば、こちらを見上げる高谷くんと視線
が合って。

早よ帰れ。

しっしつと追い払う仕草をすれば、可笑しそうに破顔して、高谷く
んは背を向けた。

その後ろ姿を見ながら、
街灯の下で見上げた横顔を思い出して、頬が緩む。

明日もきつと見つめてしまふ、君の横顔。

明日も歩く、君のとなり。

ふわふわと揺れる鼓動が、何だか恥ずかしいけれど。

角を曲がる姿を見送ってカーテンを閉めた。

「…なに着ていこうかなあ？」

普段は着ない服をあれこれ引っ張り出しながら、
私は幸せな笑いを噛み締めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2449y/>

君のとなり

2011年11月10日12時37分発行